

龜谷
行編
脩身兒訓
四

K110/
29
4

K110.1

99e

末周解

修身

規訓卷之四

第一章 厚德

龜谷行編

○今の人恩惠を受けてゐ多く記省せず。人
小恵む所あまは。微物と雖ども亦歴々心小
在り。古人言ふ人小施しては念ふ勿し。施を
受けてゐ忘るゝ勿しと。袁氏世範
○凡恩澤を報いざるの地小施を。便チ是陰徳

脩身紀綱

卷之四

龍風社藏板

を積み。以て子孫に遺をり。人を以て怒ると雖ども。敢て言をざらむ。便是陰徳を損をる處あり。言行彙纂

○唐の王仲舒。寶帯を賣りて橋を澹臺湖に築く。長三十餘丈。以て行人を濟せ。世之を寶帯橋と名づく。後三子皆貴顯あり。丹桂籍

○人妄り。樹木を毀損し。又蒸餅菓實。其他有益の物を棄つるを。是天の賜をのを無益に失ふの罪あり。若し此等の物を以て窮餒

此者小與へば。慈惠の一端さるる也。勸善訓蒙

○晉陵の梅鱗。生平義を重んじ。慷慨施を好む。中年子あり。善を嗜むこと益篤し。親戚窘乏の者あまば。輒之を救ふ。里黨の中咸仁人長者を以て之を頌き。後二子を生じ。家業巨萬。壽七十に至る。丹桂籍

○高郵の張百戸。淮安に往き。舟を湖堤に泛ぶ。遙く小船の波上より浮沈をる。幾見る。人あり。舟の背に據り。救ひを呼ぶ。張急し白金十

兩を出し。漁舟を呼びて之を救ふ。至きば其子あり。同上

○蜀漢の張裔。少くして楊恭と友と善し。恭卒を遺孤未だ數歳ふ及むず。裔を恭が母を迎へて之を事へ。恭が子の爲り婦を娶り。田宅を買ひて之を與ふ。人其義を重んじ。後益州の太守と爲る。同上

○宋に吳奎少き時甚貧し。後資政殿大學士に除せらる。青州に知より。是に於て田を買

ひ義莊と爲し。以て族黨朋友を賙え以て没せしるの日に至り。家に餘資なし。宋史吳奎傳

○宋の祖無擇。人とあり義を好みて。師友に篤し。少くして孫明復に従ひ。經術を學び。又穆脩に従ひ。文章を爲す。兩人死す。力めて其遺文を求め。彙めて世に傳ふ。宋史祖無擇傳

○宋の沈倫相位に在るの日。歳の饑ゆるま値ひ。郷人乃粟を假る者多し。皆之を與へ。殆んど千斛に至る。後又盡く其券を焚けり。宋史沈倫傳

○陳璉家甚貧。義を行ふ急なり。常不諸子を戒めて曰く。貧乏の者不遇なり。宜しく力不隨ひ。之を賑ふべし。若し富を待て。之を行ふなむ。吾が輩終不人を濟ふの期ありらん。畜徳録

第二章 躬行

○荀子曰く。凡そ百事の成るや。必之を敬むる不在り。其敗るや。必之を慢る不在り。故不敬。怠は勝てば吉なり。怠敬不勝をむ

凶あり。

○貝原益軒曰く。凡そ事を作せし。始を謹み。終を慮まば。過寡く悔少し。故不事を作せし。先づ思ふ。思をばして。輕率に事作せし。必不過ちあり。過てば必不悔あり。初學知要

○又曰く。學を思ひ不原づく。雖ども。間思雜慮甚ど。心術不害あり。學者須らく胸中を以て泰然事あり。以て有用の思慮應接を待つべし。

○又曰く。輕情ニ此者ハ學を爲すの大病なり。輕き者ハ未だ得ざるを以て既得ると爲し。惰る者ハ悠緩にして進むこと能はず。張子曰く。輕きを矯め。惰るを警むと。

○又曰く。學者固より當ふ勉強して懈らざる處。又須らく心志を寛舒ふし。精神を愛養すべし。此の如くなまを。局促の態なく。從容の象あり。二の者並び行を盡て相悖らざるべし。

○陳了翁間居と雖ども。容止常ふ莊敬なり。苟も言を發せど。一日家人と語る。家人戲を小問ふ。是實ありや否やと。公退て自ら責ること累日なり。曰く。吾豈小人を欺くとあるや。何為とぞ此問ひあるや。劉氏人譜

○宋の趙康靖嘗て二瓶を几上ふ置き。一善念を起す毎に。一白豆を投ず。惡念ふハ一黑豆投ず。始めハ黒き者多し。既にして絶て少し。久けむば善惡都て忘る。瓶豆を亦用る

丹桂
籍

○清乃張敦復曰く。人之家ニ居り。身を立つる。最奇キを好むべからず。人能く倫常ニ於て缺くるハよとみく。起居動作家を治め人を待つ。事々矩度ニ合ハらば。便是ナ君子の人。豈ハ別ニ小奇を尋ね怪を求むカんや。聰齋訓語

○宋乃劉元城。司馬温公ヲ見て。心を盡ス一已を行ふの要。以て終身之を行ふべき者を問ふ。温公曰く。其レ誠ニなり。元城問ふ。之を行ふ何

を先ニせん。温公曰く。妄語せざるより始まる。小學

○中庸ニ曰く。君子の及ぶべからざる所ノ者ハ。其惟人の見ざる所ニなり。程子曰く。學ニ闇室を欺ルべからず。始メます。

○元の許魯齋。河南を過ぐ。道ニ梨あり。衆争ひ取りて之を啖スふ。魯齋獨ニ取らざ。或人曰く。世亂ニきて主ニある。之を取ルるも何ぞ傷らん。魯齋曰く。我ガ心獨ニ主ニなるらんやと。卒ニ取ら

ぞく去る。丹桂籍

○蘇黃門。凡そ日中為き所の事。夜必ぞ之を紙に記す。人其故を問ふ。曰く。事を為せむ。必ば天理に循ふ。敢て記せざる者。敢て為さざるあり。同上

○羅馬帝泰荅士トラス。その志善を行ふに急あり。毎夜。日間のきる所を省視す。或ハ一善なれば。懊惱して曰く。嗚呼。余一日を失ふと。西稗

雜纂

○佐藤一齋曰く。均しく是人あり。游惰をせむ弱あり。一旦困苦をせむ強とある。意に慍へば柔あり。一旦激發をせむ剛とある。氣質の變化をること此の如し。言志錄

○明の蔡虛齋曰く。道德ある者ハ必ぞ多言せず。信義ある者ハ必ぞ多言せば。才謀ある者ハ必ぞ多言せむ。惟夫の細人狂人妄人乃多言まる也。劉氏人譜

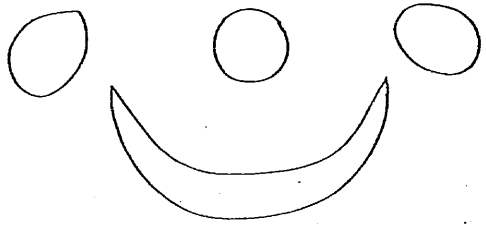
○明の薛敬軒曰く。人口を開けば皆能く禮

義を談し。名節を論ず。利を見るふ及てハ必
ど趨り。勢を見てハ必む附く。又禮義名節の
何物たるを知らざる也。畜徳録

○宋の邵康節。其子伯温。告て曰く。汝固よ
り當ふ善を為さべし。亦須らく力を量り以
て之を為さべし。若し力を量らざれば。善と
雖ども。亦為す難うらべし。同上

○宋の潘叔度ハ。呂伯恭と同年進士なり。叔
度年長トて。其學伯恭ト如うず。即首を俯し。

平心則無偏



弟子の禮を執り。之ハ
師ト事へ。略ホ難む色
み。朱子甚と稱歎也。

劉氏
人譜

○明の大祖曰く。凡そ
人善あむバ。自うら矜
る難うらべし。自から矜
れバ。善日ふ削らる。不
善あむむ。自うら恕む

べうらび。自うと恕をせバ惡日み滋也。

○又曰く。人の常情。多く己が能ふ矜り。多く人の過を言ふ。君子ハ然らば。人の善を揚げて。己が善ふ矜らば。人此過をゆるして。己が過をゆるはば。

○自の謙をせむ。人愈服し。自の誇をせむ。人必ず疑ふ。我を恭むせむ。以て人の怒氣を平らむべし。我を貪むれば。必ず人の争端を啓く致す。是皆我に存する者なり。金言

○明の文徴明。人の過ちを聞くことを喜ばず。道に及むんと欲する者あはせむ。必ず巧み他端を以て之を易へ。其説を竟へ去り。其孫震孟。狀元ふ中り。名行俱は隆し。丹桂籍

○宋の范忠宣。子弟を戒めて曰く。人至愚と雖ども。人を責むるふは明あり。聰明ありと雖ども。己を恕るときは昏し。但當り人を責むるの心を以て人を恕すべし。習是編

○韓非子曰く。智を目の如し。能く百歩の外

を見て。自うら其睫を見ること能はず。故に知るの難きを。人を見るに在らずして。自ら見ると在り。故に曰く。自かた見ふ。之を明と謂ふ。

○力餘りあまを好事を行ひ。力足らざれば。好心を存す。力足らざして。勉めて好事を行ふ。真に是、好事あり。力餘りありて。徒らに好心を存するは。好心と謂をざる也。習是編

○章文懿嘗て言ふ。學者身を奉むるは華侈

を好むべからば。苟も華侈を好めば。必だ貪り得るまことを致す。他日官に居り。決して清白あるまとな能はず。同上

○外にハ樂易ある姿態を顯せし。快活なる情状を現すも。内に深沈の性質あけまを。人々尊敬せらまは。西洋品行論

第三章 立志

○朱子曰く。學を為まは。先づ須らく志を立つべし。志既に立てば。學問次第に力を着

くべし。志を立てること定まらざれば。終り事を濟さず。

○王陽明年十一。師ふ問ふ何をう第一の事と為す。師言ふ。書を讀み及第するのみと。陽明の曰く。此未だ第一此事とせず。第一の事を其聖賢たるふ在るう。畜徳録

○福格斯フラツクス曰く。失敗をまじとも屈せず。進み往きて止まざる人も。吾が望の深く属する所あり。一試して功を成し。浮泛ふして定らざ

る人小勝ること遠し。歐米立志金言

第四章 愛日

○晉の陶侃曰く。大禹ハ聖人あり。寸陰を惜めり。衆人小至りてハ。當り分陰を惜むべし。豈逸游荒醉をべけんや。生て時小益みく。死して後小聞ゆること無きた。是自りら棄るるに。

○人あり。細々里王地窩尼ガラニニ修士小請ふ。若し間暇あらば願くを謁見を得んと。王答へし。

めて曰く。天我を戒め。常々閑暇あらしめ。若^ニ克^ク孫^ン曰く。世上の財貨も。耗散を^ト雖^ドも。後日の儉約も。因り償ふことを得^ズ。今日失ふ所の光陰も。誰^ク能く取り得る者有^ラんや。歐米立志金言

第五章 學問

○司馬溫公曰く。書を誦を成さざるべうら^ズ。或^チは馬上もあり。或^チは中夜寐ら^ズせざる時

も在りて。其文を詠^ト。其義を思へ^テ得る所多^シ。

○司馬溫公賓客も對^シ。賢愚長幼を問ふことある。悉く疑事を以て之を問ふ。苟も取る^ル。或^チは客も對^シて即^チ書^シ。率^テ以て常と爲^ス。自警編

○程子曰く。君子の學を必^ズ日^々新^ニる。日^々新^ニなる者も日^々進^ム也。日^々新^ニあらばる者も必^ズ日^々退^ク。未^ダ進^ムば^シて退^クざる

於者多有らざる也。

○貝原益軒曰く。日日ふ新とよむる者ハ。一日を一日の工夫あり。一歳を三百六十日の工夫あり。若し積て十年ふ至らば。其長進する所。測るべからば。故に學者ハ日々も新とよむることを貴ぶ。

第六章 勉強

○中庸ふ曰く。人一とびて之を能くせむを己と百たびし。人十たむと之を能くす

れば。己と之を千とひひ。果して此道を能せば。愚ありと雖ども必ぎ明み。柔ありと雖ども必ぎ強し。

○漢の董仲舒曰く。事を勉強ふ在り。勉強して學問をせむ。聞見博くして智益明あり。勉強して道を行へば。徳日も起りて大に功あり。

○漢に盧植と馬融ふ學びて。能く古今も通じむ。融が外戚を豪家あり。多く歌舞を列ね。植

侍講をること積年。未だ嘗て回顧せば。融是を以て之を敬也。後漢書 盧植傳

○銹の鐵を腐爛をるは。磁石よりも疾く。怠惰の人其傷害をるを。工作此勞より速くなり。西洋品行論

○人の一生を。始より終り至るまで。經驗習練の大學校と看做を處し。時ありて艱難辛苦の事も遇ふとも。之を天命ありと思ひ。務て學習せざるべからず。同上

第七章 倫常

○韓伯俞少しく過あり。其母之を笞つ。伯俞涕下る。母此曰く。他日笞てども汝未だ嘗て泣くべ。今泣くを何ぞや。對て曰く。昔も笞をきて痛めり。今母衰老して力乏し。もも痛ましむること能えず。是を以て泣くあり。習是編

○顧悌父の書を得る。必を拜跪して之を讀み。句毎に應諾す。後子孫繁盛比ひあり。丹桂籍

○父母卑賤ひして。我幸ふ貴きことを得た。父母此恩を忘ることなく。之を尊敬をぶす。若し高位高官ふ昇り。父母の恩を忘る者も。其罪尤も大ありといひ。勸善訓蒙

○貝原益軒曰く。毎日夙ふ起きて家庭を掃除し。先づ父母の氣色を候ひ。飲食乃好む所を問て之を進め。求めあつむ之を奉たす。勉強て其歡心を盡ますべし。家道訓

第八章

處世

訓

○呂叔簡曰く。世間往く處として意ふ拂る事なきを無し。一日と去る意ふ拂る事なきを無し。惟度量寛弘なむを受用の處あり。彼の局量褊淺なる者も。空しく自ら懊恨をする也。畜徳録

○人剛を好めば。我柔を以て之に勝ち。人術を用ひむを。我誠を以て之に感ず。人氣を使へば。我理を以て之に屈すせば。天下處し難き此事なし。紳瑜

○人の我ふ負く残以て。善を為しの心を墮
 そこと勿せ。其徳を施さる當りく。たゞ自り
 ら我が心の忍びざる所を行ふのみ。未だ嘗
 て報を責めざる也。縦むよらざる者不遇
 ふも。只一笑不付せよ。金言

○人此善性を發出せるハ。患難禍災より善
 きをゑる。譬へは香草の壓搾せらばて。馥郁

たる香氣を發するが如し。西洋品
 行論

○義爾士金エールスキンの詩ハ曰く。禍難を苦痛を覺る

あやと雖ども。實ハ福慶の積塊あり。然せど
 も禍難の中より福慶を視出せる人少なり。余
 も禍難を以て。余を試るの洪爐とを。余を

鑄るの造錢局と思へり。西洋品
 行論

○利久手爾リクテール曰く。人貧困を受くとも。何ぞ怨
 謗不平の語を出せるを用るんや。貧困ハ恰も
 處女此耳残刺るゝの痛みも過ぎざるのこ
 而して其創の中み貴重の寶玉を掛ること
 を得る。歐米立
 志金言

○衆人廣坐の中ハ争論を慎むべし。争論を必ぞ黨派を起す。若し衆中不爭論發せむ。温厚の言戯謔此語を以て。之を勸解を成し。

智氏家訓

○人乃謗果して實ならば。深く自うら悔責をべし。躬み省りて愧づること無くんを。只之を聽さんのみ。前人云ふ。何を以て謗りを止めん。曰く。辯むること無し。辯むるはと愈力むまむ。謗ること愈巧るり也。金言

○凡、族衆假貸する所あらた。吾が力量の厚薄亦隨ひ之を與ふべし。必ぞしも還せと言えず。縱ひ其欲不満とぞして之を怨むるも。亦償ひ残責する時此甚しきに至らず。習是編
○事を處する最熟思緩處を廢し。熟思を其情を得。緩處すれば其當を得。最輕忽忙亂をべうらば。至微至易の者と雖ども。皆慎重を以て之残處すべし。同上
○泛交あるをば費多く。費多ければ營も多し。

營々多事を求多し。求多せば辱多し。惟事を省きて廉を養ふ。交を慎み以て徳を成すべし。願體集

○高きを居てみづらら卑くをせば。愈光あり。卑きを居て自ら高ぶれば。愈望を失ふ。寄軒文

○凡、國家の禮文制度法律條例の類。若し能く熟觀して深考せば。以て世務に應酬し。時宜に戻らざるを得し。紳瑜

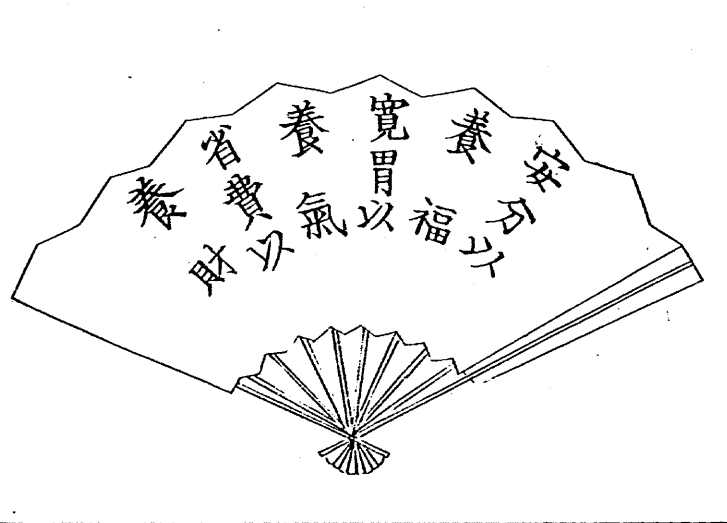
○富貴の家。貧賤なる親戚の出入をるハ。主人仁愛の厚きこと顯せ。其家の榮譽あり。然るに或て之を耻る者あり。豈誤りあらばや。家道訓

第九章 交際

○君子の交りや。道義を以て合ひ。志氣を以て親む。淡きこと水の如し。故に能く久し。小人の交りや。勢利を以て結ぶ。酒食錢を以て親む。甘きおと醴の如し。故に怨み易し。習是編

○具原益軒曰く。君子の人小接る禮讓を以て之。故尔争ふ所あり。夫此才能を争ひ。功業を争ふ。権力を争ひ。意氣を争ふ。皆小人の爲也。所。禮讓の道非也。且禍を取る此道あり。

○人不義の事を爲す



を見む。諫めて之を止むべし。知て諫めむ。諫めて力めむ。友我して過ちを遂げ成さしむる也。亦我が咎あり。智氏家訓

第十章 家制

○貧富俱に勤儉の二字を欠得也。勤ハ孜孜利を爲すに非也。唯力を竭して經營をるに在り。儉を鄙吝堪へざるに非ず。只是入を量りて出をことを爲すなり。習是編

○苟くも節儉にして。其家を保ち。其生を送

りあは。資産を小あきども精神ハ大あることを得べし。然らずして徒らに金錢を慕ふ。此人を極て貧しと言ふも亦可なり。西洋論

○主人を一家の模範あり。我能く勤めを。衆何ぞ敢て惰らん。我能く儉るる。衆何ぞ敢て奢らん。我能く公ならむ。衆何ぞ敢て私せん。我能く誠なる。衆何ぞ敢て偽らん。願體集

○他人に僮僕。我を遇むる。或ハ不恭あるも。

彼と我と主僕に分る。較ぶるも足らず。若し自己の僕婢を之を戒飾せしむ。智氏家訓

○權家の奴僕ハ。主人の權威を挾む。賓客を侮り易し。主人さる者。時々心を用ひて無禮を戒むべし。奴隸の無禮を責むる不足らば。賓客患いて其主人を誹る。至る道。

○陳確修曰く。此輩惟智慧あり。故に奴僕と為る。若し亦智慧あらむ。下賤と為らむ。此

を以て心心存せむ。自自ら苛求をるま至らむ。丹桂 籍

第十一章

改過

○周子曰く。仲由由を過過を聞くことを喜びて令名窮りる。今人過あまむ。人の規規をととを喜喜むむ。疾を護護して醫を忌忌むむ。如如し。寧ろ其身を滅滅せと。悟悟るるままあり。

○魏の陽固固を。少少くくして任俠劍客を好好む。生産を事事とせず。年二十六始始て節を折折り學學を

好好む。遂遂に博覽文才あり。魏書陽 尼傳

○唐の李安遠少少くくして檢束束を無頼の徒と游游ぶ。産を破破るるに至ふ。晚晚に節を折折り學學を嚮嚮ひ。士大夫士大夫に從從ふ。苟苟くも己己に勝勝せバ。必必に心を傾傾けて之之に交交る。安遠後後に懷州の刺史刺史に至る。新唐書 裴寂傳

○唐の趙武孟少少くくして游獵獵し。獲獲る所を以て其母母に饋饋る。母泣泣て曰曰く。汝書を好好ままむとと教蕩蕩を。吾安ん安んぞ望望んやと。為為に食食せず武

孟感激し。遂に力學して右臺侍御史となり。河西人物志一篇を著す。新唐書趙彦昭傳

第十二章

警戒

○善を為すに重を負て山に登るが如し。志已に確として雖ども力をお及ぶざるを恐る。悪を為すに駿馬に乗て坂を走るが如し。鞭策を加へざると雖ども足亦止むこと能はず。省心雜言
○堯戒ふ曰く。戰々慄々として一日を

慎む。人山に躓づくこと無くして埒に躓づく。是故に人皆小害を輕し。微事を易とす。以て患を招くに至る。初學知要
○貧賤を勤儉を生じ。勤儉を富貴を生じ。富貴に驕奢を生じ。驕奢を淫佚を生じ。淫佚を復貧賤を生じ。此循環の情理なり。多識編
○一切の事。俱に儉朴誠實を要す。浮華を學ぶ處をらむ。蓋し浮華を一時を光耀と雖ども。究に實事不益なり。人の名を敗り禍残

得る者。都て奢侈の致を所ふ由る。石天基知世事

○人生。世に於て未だ心力を勞せざる者あらざらば。或は心を勞して力を勞せば。或は力を勞して心は勞せず。若し心を勞せず。又力を勞せば。乃ち饑寒無用の人あり。紳瑜

○佐藤一齋曰く。少く才ある者を。往々好て人を輕侮し。人を調笑を。失徳と謂ふべし。侮を受る者徒らに己まば。必は憾々之を諍る。即ち自うと諍るあり。言志錄

○幼くして肯て長き事へば。賤くして肯て貴ふ事へば。愚かして肯て賢ふ事へば。此を是人の三不祥あり。總て是傲氣害を為すのみ。世人先づ傲氣を除き去り。纔ふ事を成を我得んし。知世事

○貴くして傲慢ある人。氣球の膨脹して昇騰せる者に等し。只其外貌を裝飾して。内部を實に空虚あり。勸懲雜話

○日耳曼人の語に曰く。大人の品行の中

於て其瑕疵あるを搜り出を以て専務と
を以人あり。痛べきの性情と謂ふ。西洋品
行論

○貝原益軒曰く。易曰く。天道を満つるを
虧くと。又古語曰く。多く藏むを厚く失
ふと蓋し多く財を聚めて人の貧苦を救を
ざむ。必ぞ其財我失ふに至る。家道訓

○程子曰く。吾未だ財を蓄むして能く善を
為を者を見ざる也。吾未だ誠ありて能
く善を爲す者我見ざるあり。畜徳録

○餘り有るを待て人を救む。必ぞ人を濟
ふの日なし。暇あるを待て書を讀む。終に
書を讀むの時あり。紳瑜

○人の書籍を翻へし。人の書案を塗り。人の
花木を折り損ふを。みる人ふ厭むるの事
なり。竊う人の篋中の字跡を窺ふを。尤も
不可あり。金言

○仙培那徳曰く。我他人より害を受くとも。
之を忍べを轉じて有用の物とあるを得べ

唯吾が眞實の害とあり。苦患を與ふる者
也。自己の過失も由りて得たるもの也。西洋
品行

論

○陳幾亭曰く。君子ふ二の恥あり。能くをる
所ふ矜る恥あり。能くせざる所殘飾る恥な
り。能くをを謙して以て之は居り。能くせ
ざれを學びて以て之を充つ。畜徳
錄

○洪自誠曰く。耳中常ふ耳ふ逆ふの言を聞
き。心中常ふ心ふ拂ふ此事あり。纔ふ是徳は

進み行を修むるの砥石あり。若し言々耳を
悦む。事々心を快くせむ。便チ此生を把て鳩
毒の中ふ埋むるなり。菜根
談

修身兎訓卷之四終

附錄

揚子雲前漢人 陸宣公唐人 程子宋人 兄弟 明道
稱 荀子周人 光武後漢帝 劉秀光 顏之推齊人
分 陸桴亭明人 韓退之唐人 薛文清明人
漢 魏環溪清象 程漢舒清人 馬援漢人
唐 陳幾亭明人 吳懷野明人 劉宗周明人 司馬溫公宋人
宋 胡文定宋人 辛文懿明人 陳了翁明人
字 倪文節宋人 許平仲元人 譚子
韓 伯俞漢人 呂叔簡明人 倪正父明人 洪自誠明人 周子

宋人名 陳璣明人 蘇黃門 顧悌 陳確修 張
敦 頤 鄭叔通 梅鱗 履以上六人 其
百 戶 彌爾烈爾爾 坡可 羅 禮諾爾圖勃
古 斯敦英人 福格斯斯 谷惹西戎 孫若克
孫 義爾士金 那比爾 伯氏 倍根 斯
コ ルース プロナトン スマイルス
ツ トン 富爾拉 セシル 宅林登右十九
詳 ナラザル者アリト難利久手爾日耳
ド モ大抵英國人ニ係ル

備身詩言

卷之四

光屈社藏本

明治十三年十一月廿五日 版権免許
 同 十四年六月二日 出版
 同 十五年五月卅一日 再版
 同 十七年四月九日 三版御届

第十七丁裏五行
 重複アリ再版ニ付
 改正ス

編者出版

東京府士族光風社長

龜谷

行

東京神田區金澤町十一番地

柳原喜兵衛

大坂北久太郎町

牧野善兵衛

東京通四丁目

吉川半七

南傳馬町二丁目

石塚徳次郎

麹町三丁目

石川治兵衛

同 馬喰町三丁目

發兌

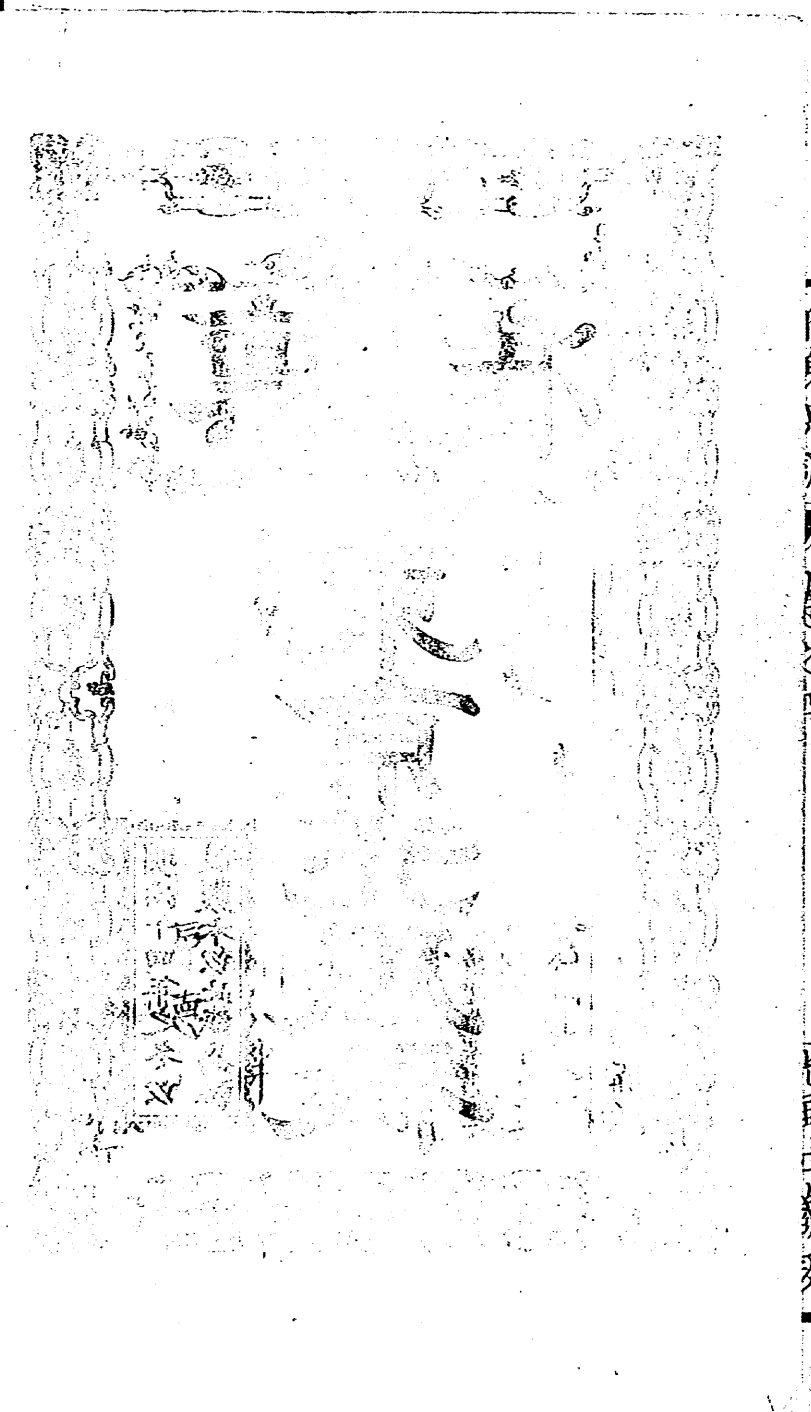
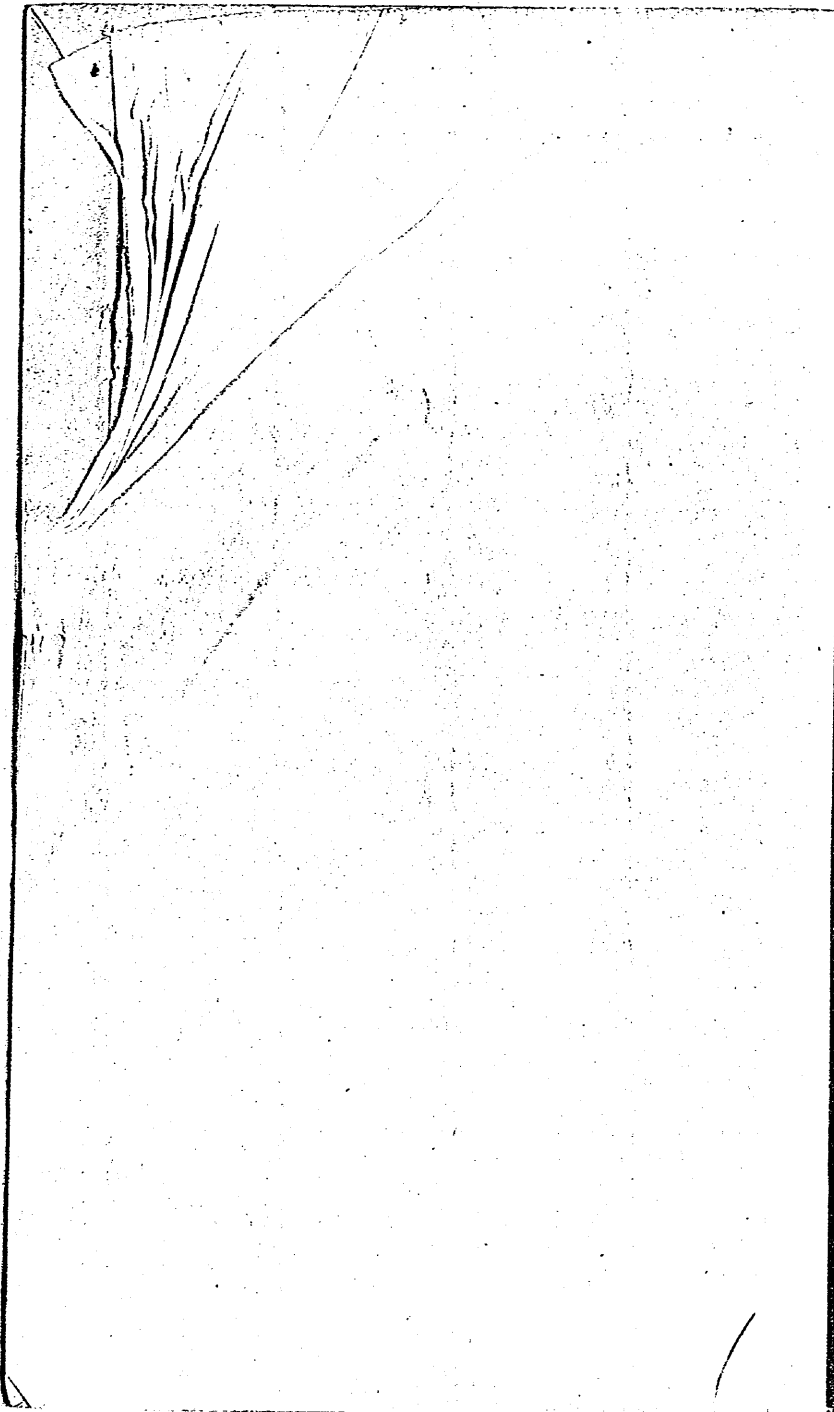
准 稟

東京光風社

明治十四年之冬以
 後製本以此紙為証



光風社藏本



LIBRARY OF THE UNIVERSITY OF CHICAGO

19

龜谷
行編

脩身兒訓

五

K110.1
29
5